

## 研究発表申込フォーム

氏名：島村一平

氏名のローマ字表記：Shimamura Ippei

所属：国立民族学博物館教授

専門分野：文化人類学

発表のタイトル（日本語）：生まれ変わりを探すグリーフケアとしてのモンゴルの転生実践

発表のタイトル（英語訳）：Finding the Reborn: Reincarnation Practices and Grief Care in Mongolia"

発表要旨（日本語で 600 字～800 字程度）：

現在、多くのモンゴル人はチベット仏教的な輪廻転生を信じている。人が亡くなると、ラマ僧が呼ばれ、「アルタン・ハイルツァグ・ネーヘ（黄金の箱を開く）」という占いの儀礼が執り行われる。これは、チベット・モンゴル仏教の一種の占星術に基づいたものだ。故人の亡くなった時期は運命通りだったか、故人をどちらの方角にどのような形（埋葬・風葬・火葬）で葬るか、などが占われるのである。その後、遺族は故人の遺体のどこかにミルクや炭などで印をつけるが、これは生まれ変わりを探すための目印である。モンゴルでは、49 日を過ぎると、人は近い親族に転生するとされているからだ。

そして 49 日以降に親族の中で新たに子どもがうまれると、その場所と同じ体の部分や反対の部位に痣や黒子がないか、探される。これを「トルル・オロホ（新しい生を探す）」という。もし痣か黒子があれば、故人の転生者として認められる。モンゴルでは新生児は、生後、三日後に親族を集めて新生児を洗う洗礼「オガールガ」が行われる。そこで、印しのある子どもは、故人の生まれ変わりとしてお披露目されるわけである。

転生者とされた子どもは、家族や親類から特別の深い愛情が注がれる。つまり、近しい人を失った悲しみは、新しい命に対する愛情へと自然に変換されていく。モンゴルの輪廻転生はグリーフケアという点から見ても極めて優れた文化装置だといえる。

興味深いことに、モンゴルと仏教文化を共有するチベットでは、化身ラマ（活仏）の輪廻転生による転生者の探索は行われるが、一般の人の「生まれ変わり」の探索は行われない。つまり「親族への生まれ変わり」は、モンゴル独自の文化と違って間違いなさそうだ。

そこで本発表では、モンゴルの輪廻転生に関する普通の人々の語りを紹介していく。人々の語りを通じて、転生が本当なのか、気持ちに揺れをもちながらも、人が死の悲しみを新たな生への喜びへと転換していく姿を描き出していきたい。